THE EAST ASIAN REVIEW

東アジア レビュー

2023年5月号
HTTP://EARI.JP/

【視点】　米韓首脳会談の 評価と展望　姜英之 ･･･1

【南の窓】　米当局の監視への不快感は伏流化か　編集部 小野田･･･3

【北の窓】　軍事偵察衛星の打ち上げ時期　編集部 ･･･5

【紀行】　出雲王国の夢のあとー鳥取編ー　姜龍一 ･･･7

【研究ノート】　マルクス唯物論批判試論
第4回　心とは果たして幻想であるか―唯物論と唯心論―　姜龍一･･･11

【案内】　東アジア国際シンポジウム　･･･13

【視点】

米韓首脳会談の評価と展望

姜英之

強硬な「北の核抑止」ワシントン宣言

国賓待遇で訪米した韓国の尹錫悦大統領とバイデン米大統領が4月26日、ホワイトハウスで会談し、北朝鮮の核攻撃に対し「米国の核兵器を含め、米韓で迅速かつ断固たる対応をとる」ことで合意、米国の「核の傘」に象徴される拡大抑止の強化を具体化した共同文書「ワシントン宣言」を発表した。

この宣言に表れた米韓首脳会談の最大のポイントは、第1に、昨年以来、核・ミサイル開発を高度化させ、国連安保理制裁決議に違反して頻繁に長距離、中短距離弾道ミサイル発射実験を繰り返し、挑発を強めている北朝鮮に対し、チキンレースを加速させるかのように最大限の戦略・戦術兵器を動員して、「北の核抑止」に断固たる姿勢を見せつけたことである。第2に、このところ米中対決が激化する中で、どちらの側にもつかず、双方とうまく立ち回るという韓国の安保戦略が、尹政権になってから明白に米韓同盟強化に傾き、いわゆる「曖昧戦術」が放棄され,米国への安保偏重が目立ち、結局は対北強硬路線、中・ロとは一線を画す外交戦略を鮮明にし、結果として、一方に北朝鮮・中国・ロシア、対して韓国・日本・米国という新冷戦の対決構図が浮き彫りになったことである。

第1に関しては、ワシントン宣言で弾道ミサイルを搭載できる米戦略原子力潜水艦の韓国派遣を明記した。これは1980年代前半以降、初めてとなる。1991年の韓国・北朝鮮合意の「非核化共同宣言」に違反するという指摘があり、北朝鮮の反発を呼んでいる。さらに、ワシントン宣言では、米韓の核戦略計画に関する協議体の新設がうたわれており、北朝鮮の核攻撃に対応した既存の合同軍事演習のさらなる強化が強調されている。

韓国の独自核武装に足かせ

尹錫悦大統領は、就任前から「主敵は北朝鮮」（聯合ニュース）とはっきり明言しており、2022年8月15日、日本からの独立を祝う光複節祝辞で「大胆な構想」として、北の非核化進展に応じて人道支援、経済協力を行うと提案したが、北朝鮮はすぐに一蹴。尹政権はますます軍事抑止力に重点を移している。

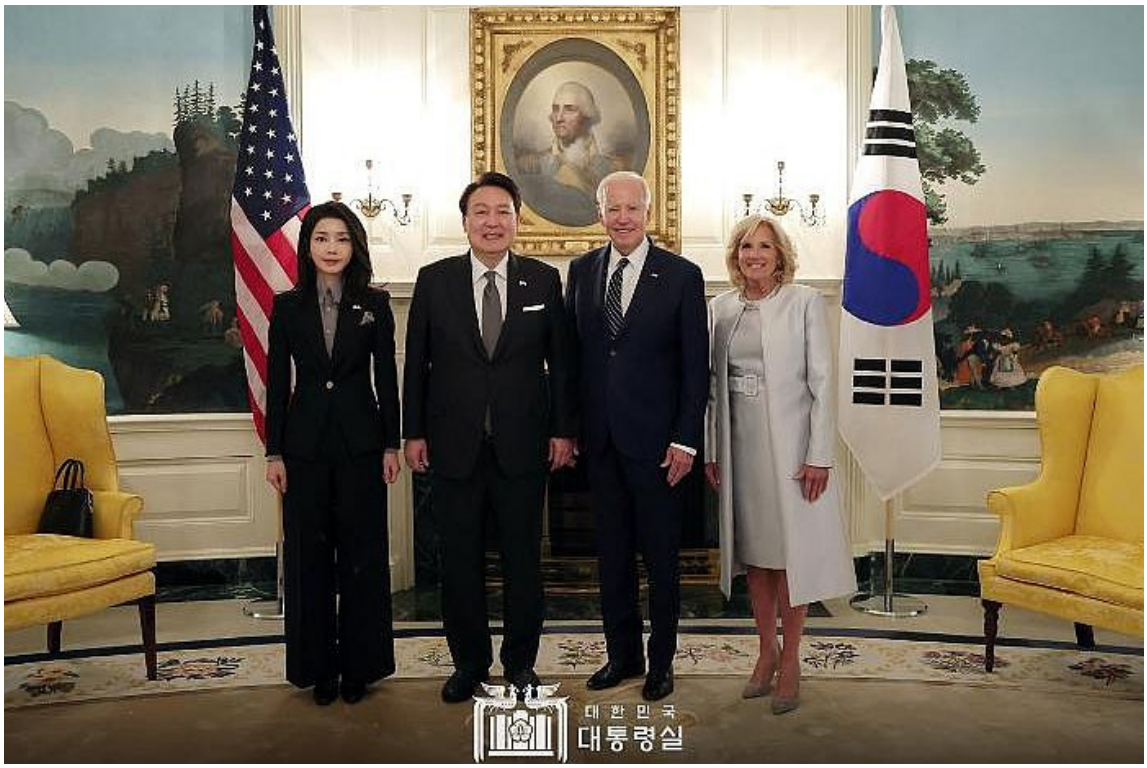
米国もまた、北朝鮮の核・ミサイル挑発に対して一歩も引かない強硬姿勢を取っている。バイデン大統領は米韓首脳会談後の記者会見で、北朝鮮が米国や同盟諸国に核攻撃を仕掛ければ北朝鮮の「終焉」を招くだろうと警告した。こうした強硬に徹したワシントン宣言であるが、韓国内に台頭する独自核武装論を抑えるには至っていない。韓国政府はワシントン宣言をめぐり、米国の核兵器が「事実上共有された」との認識を示したが、米側はこれを否定した。

こうした強硬に徹したワシントン宣言であるが、韓国内に台頭する独自核武装論を抑えるには至っていない。韓国政府はワシントン宣言をめぐり、米国の核兵器が「事実上共有された」との認識を示したが、米側はこれを否定した。韓国側は北朝鮮による韓国への核攻撃に際してては米国の「即時の圧倒的、決定的な措置をとる」との宣言内容を高く評価するが、米国側は、韓国内での戦術核配備論、独自核武装論を抑えることに重点を置いた。宣言では、韓国が核拡散防止条約（NPT）を順守すると明記しており、有事には、核を使った米国の作戦に対し韓国が通常兵器で協力するとしている。「米国が核共有を否定するのは、韓国への核配備を連想させる事態を避ける狙いがある」（産経新聞4月29日）とみられる。

このような米政府の思惑に対し、尹政権に近い保守系メディアから不満の声があがっている。リベラルな北朝鮮専門家として知られる世宗研究所の鄭成長・北朝鮮研究センター長も、「安保環境のさらなる悪化を念頭に置いて、将来の核武装の可能性も開いておくことが必要なのに、韓国は今回、自ら足かせをはめてしまった」と批判的に評価した。（同上の産経新聞）。

北朝鮮の核開発をとどめるのが東アジア地域での核ドミノ事態を防ぐ要諦だが、かつてなく強化されている同盟国、韓国の核開発への傾斜を憂慮せざるを得ないのが米国の立場だ。

この核武装に対しての米韓間のとらえ方の違いのジレンマは調整可能なのか。中国やロシアが米韓首脳の動きを受けてどんな対応を示し、韓国がそれにどう対処していくかも今後の注目点となる。



ホワイトハウスの米韓大統領夫妻。韓国大統領府の発表写真

【南の窓】

米当局の監視への不快感は伏流化か

編集部 小野田明広=共同通信社友

情報漏洩で「同盟関係」へ疑惑の目

ワシントンでの米韓首脳会談1カ月前の3月29日、準備に携わっていた金聖翰(キム・ソンハン)国家保安室長ら大統領府の要人2人が突然に辞任してしまった。晩餐会に米韓双方の有名歌手を招く準備状況が大統領に伝わらなかった責任を問われた、と韓国内ではスキャンダル風に報じた。だがインターネット交流サイト(SNS)で「同盟国」である米当局が韓国要人を盗聴していたという情報が漏洩し拡散した疑いが強まり、大騒動となった。

伝えられた米韓関係の盗聴会話の主題はウクライナ向け兵器輸出の問題。本誌が今年1・2月合併192号の『【論調】ウクライナ戦争に巻き込まれる朝鮮半島』で紹介したように、韓国は戦争が続くウクライナの隣国ポーランドに2022年末、戦車や自走砲を輸出した。ロシアが2014年、一方的にクリミアを併合した後、既に自走砲をポーランドに輸出しており、紛争周辺諸国へも韓国は積極的に売り込みを続けている（【論調】でロシア民間軍需会社を「ワグナー」としたが、「ワグネル」が一般化したので今後は「ワグネル」と表記します）。

ポーランドはウクライナの西に位置し、軍事面での支援や難民受け入れをしている。手持ちの兵器を隣国支援に回し、ポーランドの安全保障維持のため韓国から輸入して「穴埋め」するという説明だった。当初からウクライナ向け“迂回輸出”ではないかと疑う声があった。

韓国政府が以前から「殺傷力のある兵器を支援しない」立場を表明、自走砲などは該当していたからだ。さらに、ポーランド経由の道筋をつけたのは、ロシアに配慮しているように見える米国政府ではないのかとの憶測もあった。

兵器引き渡し式典がポーランドの港で行われた1カ月前の2022年11月11日には、米紙ウォールストリート・ジャーナルが、事情に詳しい複数の米当局者の話として、韓国と米国が武器取引に関する秘密協定を結び、ウクライナ向け砲弾を韓国が米国に販売すると報じた。米国が韓国製155ミリ砲の砲弾を10万発購入し、ウクライナ向け援助に転用するという内容だった。韓国側でも右派系紙の東亜日報が「韓国は2022年に砲弾10万発を米国に輸出した。最近になってウクライナ支援で不足したとして数万発の砲弾を追加輸出するよう米国は要請してきた」と今年2月24日に報じた。

その憶測を強めるように、米国防総省の機密文書と思える資料がインターネットに拡散した。

米空軍基地勤務の若者が逮捕されるまで

韓国政府要人の会話盗聴を伝えた最初の大手メディアは4月8日の米ニューヨーク・タイムズだった。通信・電波信号を傍受、収集、解読することで秘密情報を集める「信号情報（シギント）」が情報源とされた。これより3日前にインターネット匿名掲示板「4CHAN」にウクライナ軍の前線での戦況画像が流れたのが情報漏洩覚知のきっかけと報じられた。

しかしさまざまな紙誌を総合すると、実際には2022年終盤からオンライン上でゲーム愛好者が集まる「ディスコ―ド」の中の少人数の招待制「チャットルーム」で流され、履歴を残さず暗号化されたメッセージを送れるアプリ「テレグラム」などを通じて、次々に拡散していったようだ。4月2日に今度はワシントン・ポスト紙が「チャットルーム」の仲間から証言を得て、米基地勤務の銃愛好家の若者が流したと報じた。米連邦捜査局(FBI)は4月13日、オンライン上の記録などから、国家防衛機密を許可なく移動、転送したとして米空軍州兵で21歳のジャック・テシェイラ容疑者を逮捕、ボストンの裁判所で公判が続いている。

漏洩情報は米国防総省の書類からだったとされる。容疑者の勤務していたオーティス基地はカナダに近い米北東部マサチューセッツ州に位置し、北米航空宇宙防衛司令部(NORAC)の基地網に組み込まれていた。このため、統合全世界情報通信システム(JWICS)と呼ばれる国防総省のネットワークにも接続可能だった。この通信システムには、国防総省傘下の国防情報局(DIA)だけでなく、中央情報局(CIA)、国家安全保障局(NSA)、国家偵察局(NRO)など米国の主要情報機関からの多様な情報が含まれる。そのため米国が同盟諸国から秘密裡に集めた「信号情報」も漏出する結果となった。

この点では、2013年にNSAに勤務していたエドワード・スノーデン氏が当時のメルケル独首相の携帯電話を盗聴していたなど米国が同盟国要人に行っていた秘密活動を暴露したのに似た動きにもみえる（韓国も「重要情報収集対象国」だった）。同じような“確信犯”の内部告発だったのかどうか、ボストンの公判でのテシェイラ被告の証言を待ちたい。

不満の抑え込み一定の成功か

漏出文書で注目されるのは、尹錫悦大統領が国賓として訪米すると公式発表する予定になっていた3月7日の直前の段階での大統領府でのやり取り。金聖翰国家安保室長(当時)は、米国からウクライナへ砲弾 (殺傷兵器)を支援するよう強い圧力を受けている状況下で、韓国が従来の方針を転換して応じれば、国賓としての訪米と取引したと韓国世論が受け止める恐れがあると指摘。米国の究極的な目的はウクライナが早く砲弾を受け取ることなので、ウクライナに兵器を渡すルートであるポーランド向けに韓国が砲弾を売る方向を模索していこうということになったとされている。

米韓双方は早急な幕引きを急いだ。朴振（パク・ジン）韓国外相は「相当数の（漏出）文書はでっち上げられたものと評価している」と記者団に述べた。元の情報と比較すると漏出情報ではウクライナ軍の戦死者数が誇張され、ロシア軍側は逆に過少評価されているとする見方に基づいている。確かにロシアとウクライナは戦況をめぐり激しい情報戦を続けている。では誰が、何の目的でそうしたのか。軍事でなく外交関係にも適用できる見解なのか。

テシェイラ被告は2019年に入隊、2021年に国防総省のネットワークへのアクセス権限を得ていた。オースティン米国防長官は「年齢には関係ない」と指摘。

だが、機密情報の扱いに十分な教育がなされていたのか、異常な言動がなかったかどうかの点検は、IT(情報技術)専門家も例外扱いは許されないはずだ。

既視感が強い盗聴疑惑

さらに韓国の立場からすると、米情報機関による韓国当局者への盗聴は今回が初めてではない。1970年代、軍人出身の朴正熙大統領時代には青瓦台（大統領府）への盗聴は当然視され、微妙な話は庭に出て散歩しながら交わしたという逸話が残る。米議会へのロビーイング活動（コリアゲート事件）、韓国政府による秘密の核兵器開発など、確かに米国にとっては同盟国であっても聞き耳を立てるべき題材は多かった。

時代は変わり、尹錫悦大統領時代になって、大統領が執務する場所は青瓦台から龍山の軍営施設内に移動した。

野党の一部には、大統領府移転が盗聴される機会を増やしたと批判する派や、米政府に盗聴疑惑を招いた責任について謝罪を求めるべきだという「民族派」もいる。北朝鮮に対抗して独自の核兵器を持つべきだと世論調査で答える韓国民の背景には、果たして米国が信頼するに値するかという疑念があることも確かだ。

防衛産業の振興と平和維持活動の矛盾、中国やロシアへの配慮、南北対話が遠ざかる中で新冷戦構図はさらに深まっていくのかどうか。韓国にとっては盗聴疑惑で刺激された「同盟国・米国」への不快感は、当面、これら課題の変化状況に応じて、外交や社会の表面から目立たない形で伏流として流れていくことになっていきそうだ。

【北の窓】

軍事偵察衛星の打ち上げ時期

編集部

六面体の小型衛星イメージ図
北朝鮮の実際の衛星はどうなるか？

2022年からミサイル打ち上げを続けてきた北朝鮮。金正恩朝鮮労働党総書記（国務委員長）は4月18日、国家宇宙開発局を現地指導し、軍事偵察衛星1号機の打ち上げ準備を急ぐよう指示した。米国が原子力空母と核戦略爆撃機など戦略装備を朝鮮半島と周辺地域に常時配備、今後も「拡張抑制力提供」「韓米同盟強化」の名目で、軍事的締め付けをさらに強化するだろうと述べた。4月に完成したという軍事偵察衛星1号機を、計画された期日内に発射できる委員会の構成を求めた。

北朝鮮ディアによると、総書記はこの席では「打ち上げ期日」に直接言及しなかった。だが従来の北朝鮮報道から、４月末までとの見方が有力だった。

だが４月末までには軍事偵察衛星の打ち上げ報道はなかった。ではいつ実施するのか、実施間近と伝えられてきた第8回核実験に踏み切る時期も依然不明なままだ。

オンライン雑誌「ニュー・イースタン・アウトルック」はその4月30日、ロシア科学アカデミー「中国・現代アジア研究所」コリア・センターのアスモロフ主任研究員の分析を載せた。これを手掛かりに時期を絞ってみよう
（原文英語は記事末尾のURLを参照）。

ロケット/ミサイル、地球観測/軍事偵察

1998年8月に北朝鮮がテポドン・ミサイルを発射、1段目と推定される飛翔体の一部が日本海に落下したあと、東北地方の上空を横切って三陸沖の太平洋に残りも落下した。これに刺激されて、日本で情報収集衛星導入の機運が高まり、光学衛星とレーダー衛星を一組にしたロケットが2003年3月に打ち上げられた。大規模災害にも対応できる多目的の「情報収集衛星」で、設計された寿命後も使われている衛星や、打ち上げから稼働まで時間がかかることなどから複雑だが、現在9基または10基体制で運用されている。

衛星打ち上げロケットと軍事ミサイル発射は基本的に同じ技術なのは、よく知られている。「情報収集」が、災害や環境状況を見積もるのと、軍事施設の動向を監視する両側面を含むのも、周知の事実だ。

金正恩総書記の宇宙開発局での談話でも、自然資源の保護と活用とともに、防衛能力を強化するうえで通信衛星技術の向上を図らねばならないと強調していた。同時に今後は連続的にいくつかの偵察衛星を多角配置し、衛星による偵察情報収集能力を強固に構築する必要性を指摘していた。

ソウルにある北朝鮮大学院大学の梁茂進（ヤン・ムジン）教授は、朝鮮半島全域を24時間偵察するには少なくとも24個の稼働が必要だと話した（聯合ニュース）。北朝鮮は6回にわたり人工衛星の軌道投入を試み、うち2回は成功。2022年段階で、宇宙軌道に乗っているのは、2012年12月発射の光明星3-2号と、2016年2月発射の光明星４号とされる。光明星3-2は地上局との定期的な通信がされていない。光明星４には地上観測用カメラと宣伝放送を伝送する通信装備が搭載されているとされるが、撮影された地上観測映像を公開したことがない。2022年12月には「衛星試験品」の性能試験をしたと写真を公開したが、専門家から解像度などの評価は低かった。

ロアスモロフ主任研究員は、専門家の見立てとして、技術的な課題克服に数カ月かかり「年内に打ち上げになろう」と予測。

今回の金正恩氏の現地視察写真に登場した衛星モデルは六面体で、4つの太陽光発電パネルや2個の光学カメラを備え、重量300キログラムと推定されている。

アスモロフ研究員は、第8回核実験が国際舞台で北朝鮮バッシングに傾きやすい危険性に比べると、衛星打ち上げは「少ないリスクで強い対外強硬姿勢を誇示できる」として優先的に進められるだろうと予測。

現時点では北朝鮮の軍事偵察衛星がもたらす危険性は限られているが、核やミサイル開発を進めた実績からみて、決してあなどるべきでなく、精密に情報分析を進めるべきだ、と韓国の専門家はみている―。これがアスモロフ氏がまとめた結論だ。

原文URLは――
https://journal-neo.org/2023/04/30/waiting-for-the-launch-of-north-koreas-first-military-intelligence-satellite/

【紀行】

出雲王国の夢のあと　鳥取篇

姜龍一（作家）

いよいよに迫った、当研究所主催の「日韓古代史国際シンポジウム」の発表の為もあり、かねてからの宿願であった出雲国の土を踏まんと、中国自動車道を一路西へと走らせた。姫路を過ぎたあたりから、中国山脈の緑が拡がる。窓越しに風を切る音が、時に心地よく聴こえたりもした。

シンポジウムでの発表者は、僕以外皆、大学教授。その道一筋、古代歴史の専門家達だ。対する僕は、大学なんて、一年ちょっとで辞めちゃったから、最終学歴は所謂“高卒”。学歴だけで判断すれば、彼我の実力は雲泥の差である。尤も、そんなことに怖気づくような僕ではないが、東京あたりの空調の利いた図書館かどこかの机の上で考えた、紙の上の歴史を語ったところで、本当の真実らしきものには肉薄できる筈などないと、直覚的に解っていたので（これは僕の人生観であり歴史観なのだ。）、迷わず僕は現地へと向った。研究対象の、その現場へと。

それでは、今回の国際シンポに於ける、僕の研究発表のテーマはなにか。それは須佐之男命である。もっと正確にいうならば、（記紀の伝承を信ずるならば）日本にはじめて国を造り給いし須佐之男命が、折口民俗学等が説くところの「まれびと※」の原型だったのではあるまいか――ということである。

ご承知のように、勿論このような問題は、未だ実証されている訳ではないし、それ以前にそもそも、「記紀」《神代》などに見られる神話自体が、戦後の唯物的歴史観の隆盛の中で、殆ど毀損せられて、と言ってもよい程、否定されている。それ故、現代の学界に於いて、これら《神代》の伝承などが、まともに省みられることなどないのが現状なのではないかと思うが、だからとて、それが絶対的正義だなどとは、どうしても僕には思えない。

それどころかむしろ、現代の歴史学界に於いて閑却せられた日本神話にもう一度スポットを当て直し、それを大真面目に真正面から、学び、研究し、語り合うことで、見えてくる新地平もあるのではないか。そういう風に僕は思うのである。そして、そいつが僕の古代探求――須佐之男研究の、第一義的の興味でもあり動機でもあった。

そんな訳だから、今回の僕の研究旅行は、はじめから何らかの実証的な目的意識を設定し、その証拠を確認しに行く、というような性格のものではなかった。輪郭は未だ定かならぬが非常に強い魅惑めいたものを帯びた直感が、僕を出雲に引き寄せたのだ。果たしてそれが何処に行き着くか、そいつは僕にも解りはしないが、今回の旅で何を感じ、何を掴むことが出来るだろうか――、その興味こそ、今回の旅の目的と、言い切ってしまってもいいような気がする。

それでは諸君、暫しのあいだ、「まれびと」の始祖たる須佐之男命、そして命の造り給いし始元(はじめ)の国家「出雲王国」の、その足跡を辿る時間旅行に、同伴して頂くこととしようか。

満開の山桜（因幡万葉歴史館にて）

因幡の素兎(しろうさぎ)

　ご存知の方も多いかと思うが、須佐之男命の造り給いし日本最初の国である“出雲王国”の領土というか勢力圏は、現在の島根県出雲地方にのみとどまるのではない。少なくともそれは、現在の鳥取県鳥取市まで、現代ではパワースポットとしても有名な――因幡の素兎――の伝説の舞台、白兎(はくと)海岸の辺りまで拡がっていた。

　騙されたことに気づいた鰐に全身の皮を剥がれて泣いていた兎を、あはれに思いお救(たす)けになった大黒主神は、申す迄もなく、須佐之男命の娘婿であり、また須佐之男命の七代孫であるとも伝えられている、出雲王国最後の大王(おほきみ)であらせられる。その、出雲に坐(いま)す大黒主神が、絶世の美女・八上姫(やがみひめ)のお噂をお聴きになり、姫をお求めに因幡国までお出ましになった――この伝説を信ずるならば、因幡はもとより、出雲より因幡に至るまでの通り道である伯耆国も含めた鳥取二国は、出雲王国の領土であったと考えるのが自然であろう。

　そして、仮にこの素兎の伝説が、お伽噺に過ぎないとしても、大黒主神のその伝承が因幡に遺(のこ)っているということは、須佐之男命――大黒主神の“出雲王国”の同じ信仰、同じ伝説を、因幡の人々も信じていたということの実証的証拠であると言えよう。

　――国家とは共同の幻想である――。

　これはあまりにも有名な吉本隆明の言葉であるが、この言葉はひっくり返してこういう風に、言うことも出来るのではないかと思う。

　――国家とは共同の信仰である――と。

白兎神社

　扨(さて)、話を現実に戻そう。鳥取西ICで高速を降り、(なんと鳥取県内は高速料金が無料なのである！)、予約してあった市街地の或る温泉旅館に荷を下ろし、チェックインを済ませると僕は直ぐ、先述の白兎海岸へとハンドルを切った。JR鳥取駅から車で５分とかからない宿から、１０キロと離れていなかった。国道９号線に出て、海岸沿いを少し走ると、すぐにそれはあったように記憶している。海岸から国道を隔てた向こうには、縁結びの神様として有名な白兎神社が小高い丘の上に鎮坐していた。そして、その麓には道の駅。僕は道の駅の駐車場に車を停めた。

　せっかく来たので、先ずは丘の上まで石段を登り、白兎神社を参拝してみる。丘を登り切り振り返ってみると、眼前に鳥居。そして眼下には青い空と海。心まで、開放感に満たされるような青の景色が一面に拡がる。長時間運転の疲れも吹き飛ぶ絶景であった。

　社内を少し散策すると、「来年は彼女と来れますように……」　そんな風な願いを書いてある若者らしい素直な絵馬が目に入る。思わずクスリとしてしまう。

　参拝を終え、丘を降ったところにある道の駅に入った。車で来たのでビールが飲めない。なので道の駅定番の、ご当地ソフトクリームを買った。やはり道の駅のソフトクリームは、日本全国どこのもうまい。僕はそいつを舐めながら、窓の向こうの海岸を、そしてその向こうの海を見ていた。

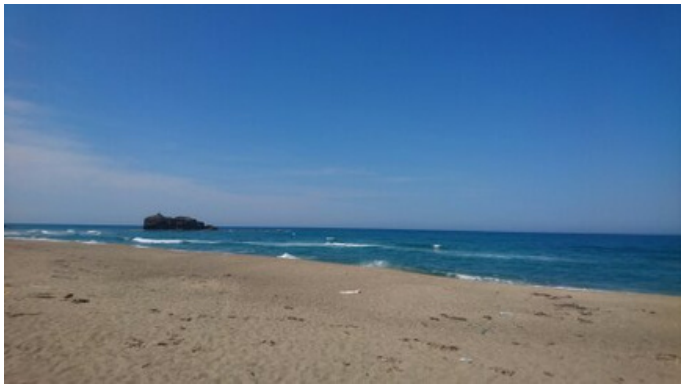
この海の向こうの沖の島から、件の素兎は来たのだという。それでは、その「沖の島」とは何処を指すのか。それは諸説あり、この海岸から１０メートルほどしか離れていない申し訳程度の岩礁がそれだという説もあれば、出雲から約９０キロ離れた隠岐国のことだという人もある。鰐を並べて対岸の、この白兎海岸に辿り着いたには、どちらも無理があるような気がしないでもないが、どうせなら僕は、隠岐国説を支持したい。その方が雄大なる古代浪漫、日本神話の偉大が感じられ面白いじゃないか。

そんな風に僕は考えて、悠久の歴史ロマンに想い馳せながら、車に積んでいた木刀を取り出して海岸に出た。日本最初の国家たる“出雲王国”の地を踏んだ初日、群青色の因幡の海を、遥かなる日本海を臨みつつ、僕は木刀を振り、剣舞を舞った。

「海よ、見給へ！　これぞ武士(ものゝふ)の魂であるぞ！」

そんなロマンティスムに心委ねつつ……。

あたらしき　くにはじめより　ふたちとせ
そのあとしたふ　のちの世のひと



白兎海岸

鳥取港

白兎海岸から海岸線を１０キロばかり走ったところに、鳥取港「かろいち」という魚市場がある。都会だと数千円は下らないであろう大きな紅蟹を、たった千円で丸ごと一匹食うことが出来た。濃厚な蟹の旨味が日本海の荒波によって凝縮されて、実に美味だったことは言う迄もない。

筆者(鳥取砂丘にて。風強し)

――出雲篇へつゞく――

※「まれびと」
明治から昭和にかけて活躍した民俗学の大家・折口信夫の学問(折口学とも称される)の根本概念。
第一義的には、海のあなたの常世の国より、村人たちの生活を幸福にする為、時あって来たった神である。
折口学では、まれびとの来臨こそが、日本の文明・文化の発生、及び発展の基であったと言われている。

【研究ノート】

マルクス唯物論批判試論

第４回　心とは果たして幻想であるか
―唯物論と唯心論―

姜龍一（作家）

　マルクス主義の本質はなにか？　それを求め、そしてその是非を判ずることが、今回の主題である。読者の理解の便宜上、マルクスの思想を、あえて大きく二つに分けるとするならば、その双翼は、唯物弁証法と史的唯物論の二者であることを、否定する者はあるまいと思う。故にその二者を、マルクス主義という伽藍を支える二大支柱であるとするならば、二者の共通項は何であろうか。勿論それは、名は体を示すという言葉の通り、両者共、唯物論に立脚しているということである。

　そしてそれは、「宗教は民衆の阿片」であり、「人間が宗教をつくるのであり、宗教が人間をつくるのではない」という、前出のマルクス自身の言葉とも一致する。また、マルクスは「民衆の幻想的な幸福である宗教を揚棄することは、民衆の現実的な幸福を追求することである」とも言っているのは、前回分をお読みになった方はご承知のとおり。如何なる思想や哲学であれ、その究極的目的は、人間としての、幸福の追求でしかあり得ないということを前提するなら、《幻想的幸福である宗教を否定することなしに、人間は、現実的幸福を追求することは出来ない》と主張する、唯物論哲学に立脚したマルクス主義のその本質は、《宗教の否定》であり、その宿命的本尊たる《神の否定》である、という結論に達する。これは何人（なんぴと）も否定出来ない論理的帰結であると言えるであろう。畢竟(ひっきょう)、《マルクス主義の本質は神の否定》にこそあったのである。そして、恐るべきことには、《神の否定は、人間性の否定、心の否定へと直結する》。なぜか。それをこれから論じていきたい。

　マルクスの盟友であり、その経済的支援者でもあったエンゲルスは、当時、左派論壇において人気を博した、いわゆる「空想的社会主義者」オイゲン・デューリングの思想を駁論せんと、マルクス主義の世界観を包括的に叙述した「反デューリング論」という書物の中で、宗教、そして神の存在についてこう述べている。

　いっさいの宗教は、人間の日常生活を支配する外的な諸力が、人間の頭のなかに空想的に反映されたものにほかならないのであって、（中略）、唯一神そのものはこれまた抽象的人間の反射にすぎない。
（「反デューリング論」　555ページ　村田陽一訳　大月書店）

　エンゲルスのこの論によれば、宗教は外的な諸力、すなわち事物の反映たる幻想に過ぎず、神もまた、抽象的人間（人間のつくった願望的理想像としての超人）に過ぎない。だとすれば、宗教や神というものは、現実世界のどこにも存在する筈のない、物質たる人間の脳髄が生み出した、外的事物に対する幻想的意識の反映に過ぎないという結論に至る。

　そして、まさしくそれは、「物質のみが実在するものであるとして、精神や意識なども そこから導こうとする哲学的立場（学研現代新国語辞典）」たる唯物論哲学の基本的立場そのものであるが、この命題が成立する為には前提として、―全ての意識（精神）は、全て脳髄（物質）の反映である――という定義の科学的証明が必要である。そう考えるのが科学的思考というものであり、現代知識人としての実証的態度であると言えるであろう。

　それでは、果たして本当に、全ての意識は、全て脳髄の反映であるか。全ての精神的現象は、全て物質的諸条件の反射に過ぎないものであろうか。

それに関して、戦前のフランスを代表する哲学者ベルグソンが、自身の主著「物質と記憶」のなかで、非常に興味深いことを述べている。「物質と記憶」をまだお読みでない方の便宜のために、その主旨を簡単にご紹介すると、この書物のなかでベルグソンは、表象（イマージュ、つまり意識）は脳髄の随伴現象であるのか否か――全ての精神は、全て物質の反映であるか――という、まさにその問題と、真正面から向き合っている。そして、彼の長年にわたる失語症患者の研究を通して、次のような歴史的大発見をするに至るのである。ここからは本文を引用しよう。

記憶は恐らく脳皮質中に蓄積されてゐるといふ説の根拠として人々の引き合ひに出す事実上の議論は、悉く記憶の局所的疾患から導かれたものである。けれども、果たして記憶が実際に脳髄に蓄蔵されてゐるとすれば、確定的な忘却に対応して特定なる脳髄の損傷が存在すべき筈である。然るに、例へば、吾々の過去の存在の一時期の全体が突如として全然記憶から消滅するやうな種類の健忘症に於て、吾々は一つも確定的な大脳の損傷を認めない。またその反対に、大脳限局が明確な記憶の障碍、即ち種々の失語症や、視覚または聴覚の再認に関する疾患に於ては、或確定的な記憶がその位置する局所からいはば引き抜かれるのではなく、回想の機能が多少その活力に於て減少を来し、恰かも患者がその記憶を現在の状況に接するのに多少の困難を感ずるやうに見える。それで、脳髄の職能は細胞のうちに記憶そのものを保留するのではなく、寧ろその接合作用を確実にするに存するのではないかといふ問題を決定するために、吾々はこの接合の機構を研究せねばならなかつた。かくして、吾々は遂に過去と現在との相接合し来る漸進的運動、即ち再認作用をその凡ての曲折に於て追随することになつたのである。そして実際吾々は、現存する対象の再認作用は全然違つた二つの仕方で行はれ、而かもその何れの場合に於ても脳髄は心象の貯蔵所ではないことを発見した。

（「物質と記憶」290～291ページ　高橋里美訳　岩波書店　※大正３年刊）

以上である。脳髄（物質）は、心象（精神）の貯蔵所ではない。それを証明したことが、ベルグソンの歴史的偉業であったと私は思う。なぜならば、それにより、《意識（精神）は脳髄（物質）の随伴現象ではない》という事実が実証される。そしてそれは、――全ての意識（精神）は、全て脳髄（物質）の反映である――という、神が人間の意識の反映であると断定するための、論理的、科学的前提条件は成立しない、ということの証明たり得る。それは、先程の「反デューリング論」その他において、マルクス、エンゲルスが「科学的社会主義」と公言し述べていた思想体系の科学的根拠の、根源的破綻を意味するのである。マルクスの謳う「科学的社会主義」というものは、その理論的及び科学的根拠そのものが、似非科学に立脚していたと言わざるを得ないという結論に達する。

もしもマルクスの言うとおり、神というものが人間の、倒錯した意識の反映に過ぎない幻想であるとしたならば、神を慕うという人間の心も、また幻想であるということになる。人間の心というもの自体が、幻想であるということになる。そしてこれまで見てきたとおり、マテリアリスム（唯物論）はそう言っている。

だとすれば、神であれ、美であれ、愛であれ、物質的生活の諸条件を超えた、より大いなるものを求めんとする人間の心というものは、全て物質的諸条件に起因する倒錯した意識の反映であるか？

神とは何か。美とは何か。愛とは何か。

神を慕うというその心情は、人間の倒錯した意識の反映であるか？

真善美―その源泉の感情は、一体どこからやって来るのか！

人は時として、心を守るため、命さえ捨てる。その心こそ、至純の心であるとさえ言えよう。もしも心が、物質的諸条件の反映に過ぎないとしたならば、時には唯物論者さえもが、この世のどこにも存在しない物質的諸条件の倒錯的反映たる空想のために、命さえ捨てているその理由……それを一体、何によって説明すればよいのであろう。

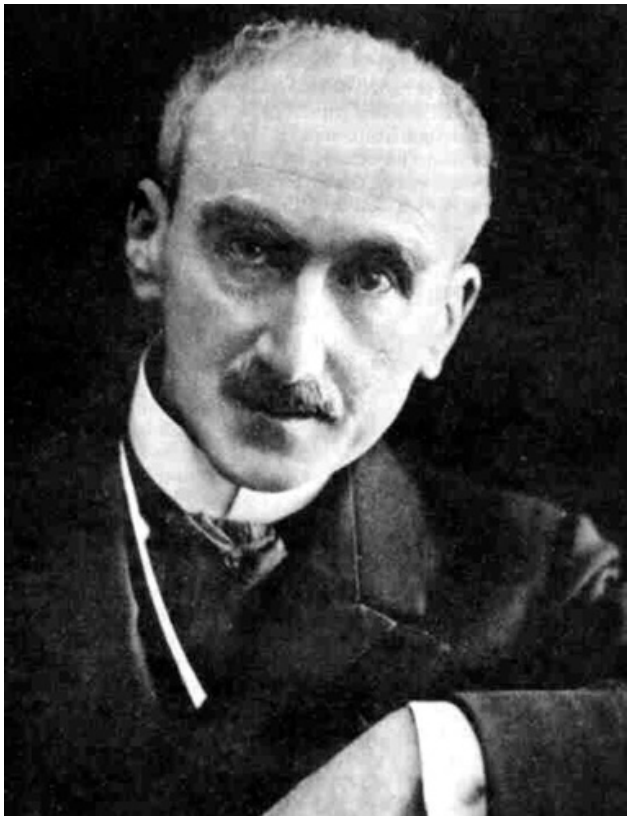
エンゲルスは同じ論文の中で、

この行為（共産主義社会の実現　※筆者注）がなしとげられたとき、すなわち、社会がいっさいの生産手段を掌握しそれを計画的に運用することによって、社会自身とその全成員とを、現在彼らがこの生産手段――彼ら自身で生産したものでありながら、優越する外的な力として彼らに対立しているところの――のためにおとしいれられている隷属状態から解放するとき、したがって、人間がもはや事を計画するだけでなく事の成否をも決するようになるとき、そのときはじめて、いまなお（その生産結果の不確実性の反映として※同上）宗教に反映されている最後の外的な力が消威し、それとともに宗教的反映そのものも消威する。それは、そのときにはもう反映すべきものがないという、簡単な理由によるものである。
（「反デューリング論」556～557ページ）

と述べているが、もしも本当にその論が、真実であるとするならば、人類歴史が忘れもしない冷戦末期、マルクスのお膝元たるドイツの地にて、まさに前出の「反デューリング論」の理論のとおり、社会が一切の生産手段を掌握し、それを計画的に運用していた共産主義国家・ドイツ民主共和国――東ドイツのその中で！、あまりにも多くの人民たちが、自由を求め、民主主義を求め立ち上がったとき、その起爆剤たる求心点が、「もう反映すべきものがない」が故、消滅していなければならないはずの、宗教の、その拠点たるキリスト教会であったその事実！――。一体それはどうすれば、納得のゆく説明が出来るのであろう。

……ここまで書いて来て私には、どうしても、あるひとつの言葉が、思い出されてならないのである。――人の生くるはパンのみによるに非ず――と。
（※「マタイによる福音書」第４章）

＜続く＞



アンリ・ベルグソン（1859~1941）
戦前のフランスを代表する哲学者。
唯心論的な立場から、意志と時間の関係についてなど、多岐に亘る研究に取り組んだ。
主な著書に『時間と自由』、『物質と記憶』、『創造的進化』など。
１９２７年ノーベル文学賞受賞。
日本においても「文学の神様」小林秀雄をはじめ、多くの思想家・文学者に多大なる影響を与えた。

【案内】

テーマ
日韓関係改善のための新しい接近方法

―悠久な歴史の中から、和解友好の鍵を探す―

日韓両国が戦後最悪の関係にあるとされていますが、韓国の尹錫悦政権の登場で変化がみられます。尹大統領と岸田首相の首脳会談も10年ぶりに実現し、外交的関係改善の兆しがみられます。また再びの韓流ブームの波に乗って、コロナ禍沈静化に伴う入国規制の緩和に伴い、両国若者の相互旅行者の数が急増しており、両国間の国民の好感度が増しており、相互理解が進んでいます。しかし、慰安婦問題、徴用工問題など近・現代史をめぐる懸案があり、いまだ、ギクシャクした関係が残っています。、緊張する東アジア情勢の中にあって日韓の和解・友好親善関係こそ東アジアの安定と平和、繁栄、両国の発展に必須であります。

本シンポジウムの目的は、過去に縛られず未来志向の日韓関係構築の意味と当為性を、5000年の日本と朝鮮半島の悠久の歴史を紐解きながら、両国関係改善の鍵を探すことにあります。韓国の古代史専門の大家、李徳一先生と中世の朝鮮精神思想史専門の大家、小倉紀蔵先生の基調講演を中心に両国民の相互理解と未来友好に資する討論を進めます。
各位におかれましては、調査研究、言論報道、政策樹立、さらには、将来のビジネスチャンスを探るうえで貴重な場となることと思い、ご案内申し上げます。

――――――――――――――――記――――――――――――――――

日時 2023年5月17日（水）12時受付、13時開始、18時懇親食事会（会費5000円）
会場 東京・学士会館210号室（地下鉄神保町駅A9番出口前））
主催 東アジア総合研究所　韓国ハンガラム歴史文化研究院
後援 駐日韓国大使館　日本外務省　日韓・韓日親善協会中央会（以上、予定）
参加費　3000円（資料代を含む）
申し込み方法　下記の事項を記入してFAX03－6231－2862または当研究所のe－mail eari_kang07 @yahoo.co.jp にてお送りください。

2023東アジア国際シンポジウム参加申し込み

氏名
所属
住所
電話番号
FAX番号
Email 住所

【編集後記】

今月号から記事の字体を「青色背景に白文字」からモノクロに変更しました。少しでも読みやすくなればと思っています。またホームページ冒頭から「東アジアレビュー」の本体に飛ぶ入口ページを少し変更しました。内容を把握しやすくなるように、記事の表題と筆者名だけに絞り、従来よりも大きい字で並べるようにしました（何ページ目からの数字は削りました）。ご意見をどうぞ。

東アジアレビュー 2023年5月号
第33巻 ・ 第4号　通巻 195号
2023年5月8日 発行
発行人　姜英之
編集人　小野田明広
発行所　一般財団法人　東アジア総合研究所
TEL 03-6231-2361　　FAX 03-6231-2862